

## コリント人への手紙第一16章22節 「マラナ・タ」

### 1A 主を愛さない者への呪い

#### 1B 罪による呪い

1C アダムとエバ

2C キリストの十字架

3C 神のかたちへの建て上げ

#### 2B 打ち壊す偽教師たち

1C 知識による高ぶり

2C 妬みや苦み

3C 行いによる実

4C サタンの企み

#### 3B 建て上げる人と引き下げる人

### 2A 「主よ、来てください」

#### 1B ローマ迫害下のキリスト者

#### 2B 上を見上げる信仰

1C 永遠の残るもの

2C 過ぎ去る世

3C 主にある喜び

#### 3B 主への愛の言葉

1C 花嫁なる教会

2C 引き落とす者たちへの呪い

## 本文

コリント人への手紙第一 16 章を開いてください。私たちはついに、コリント第一の最後の章にきました。午後礼拝で一節ずつ学びますが、今朝は 22 節に注目しましょう。「**主を愛さない者はみな、のろわれよ。主よ、来てください。**」なんとも、すごい、過激にさえ聞こえる、パウロの言葉です。

彼は、21 節で、「私パウロは、自分の手であいさつを記します。」と書いています。そう、これまでは口述筆記だったのです。彼は、自分のいくつかの手紙の中で、この手紙が偽物ではなく、自分自身のものであることを明らかにするために、署名のようにして最後に自分の手で書き記しています。ガラテヤ書によると、彼は大きな字でそれを書いています。日本語の聖書では、もちろん、同じフォントのサイズですから分からないのですが、原本でしたら、急に文字が大きくなったのでしよう。彼は目が悪かったのではないかとされています。自分の直接の思いを、署名のようにして

書き記したかったのは、この過激にも聞こえる端的な言葉、「**主を愛さない者はみな、のろわれよ。主よ、来てください。**」だったのです。

### 1A 主を愛さない者への呪い

使徒たちは、主を愛していました。ペテロが、イエス様に、「あなたはわたしを愛していますか？」と問われて、「あなたは、私<sup>が</sup>あなたを愛しているのを知っておられます。」と答えました。三度も同じように聞かれるので、彼は心を痛めました。(ヨハネ21:17)彼らは、多くの弟子たちがイエス様につまずいて去って行っても、最後の最後まで付いて行った人々です。ペテロは、主に言いました。「ヨハ6:68 主よ、私たちはだれのところに行けるでしょうか。あなたは、永遠のいのちのことばを持っておられます。」他の人たちは、これが生きる道、あれが生きる道という、他の生きる道がありました。けれども、彼らは他のどこにも道はない、と分かっていました。自分がどこに行っても、結局、そこには偽りしかない、虚しさしかないと分かっていました。イエス様にのみ、永遠のいのちのことばがあると知っていたのですから、どんなことがあってもこの方から離れることができません。

彼らは、十字架にイエス様が付けられる時は、逃げて行ってしまいました。けれども、イエス様はそれも織り込み済みです。旧約聖書で、羊飼いが打たれたら羊たちは散ってしまうという預言がありますし(ゼカ 13:7 参照)、予め信仰がなくならないように、父なる神に執り成して祈っておられました。どんなことがあっても、この方から離れることはできない、この方以外に、救われる名としては天下にはない、と知っていたのです。それだけ愛していました。

それはとりもなおさず、イエス様が彼らを愛しておられたからです。「Iヨハ 4:10 私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、宥めのささげ物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。」自分の犯した罪のために、神の怒りを受ける宥めの供え物として、イエス様は死んでくださったのです。ここに愛があります。この愛に駆り立てられて、今の私があるというのが使徒たちの告白だったのです。そして、使徒たちの教え、このイエス・キリストの福音を聞いて、信じ受け入れ、同じように主を愛する者たちが、キリスト者と呼ばれます。

そして、「**主を愛さない者**」とは、そうではない者たち、とりわけ、主イエスの名を使っているが、行いにおいて否定している者たち、偽教師たちのことを指して使っています。彼らのことについては、後で説明します。

### 1B 罪による呪い

そしてパウロは、「**のろわれよ**」と言っています。この呪いは、藁人形を木に打ち付けるような、恨みがこもった呪いのことではありません。人が神から背を向けて、その罪によって、もたらされた結果のこと、その状態のことを呪いと言います。呪いは、ことさらに悪いことが起こるようにさせるのではなくて、神が良いお方で、神がとても良いことを行ってくださっているのに、人のほうが勝手に

神から離れて、神の恩恵からも離れているようになっていて、呪いと呼びます。

### 1C アダムとエバ

神が、エデンの園の中央に、いのちの木と、善悪の知識の木を置かれましたが、善悪の知識の木については、そこから実を取って食べてはならないと言われました。「その木から食べるとき、あなたは必ず死ぬ。」と言われました(創 2:17)。けれども、アダムの罪エバは蛇に惑わされ、食べました。そして妻は夫に渡して、夫も食べました。

それによって、蛇に対しては、お前の子孫の頭を打ち砕くと宣言されました。そして女に対しては、こう言われました。「3:16 女にはこう言われた。「わたしは、あなたの苦しみとうめきを大いに増す。あなたは苦しんで子を産む。また、あなたは夫を恋い慕うが、彼はあなたを支配することになる。」子を産むということは、神の祝福ですが、その産む時に苦しみとうめきが増します。そして、夫を自分のものにしたいと思っても、結局は男が自分を言いようにあしらっていく、ということです。とても生々しい呪いですね。神は元々、そのように男女を造られたのではありません。けれども、人が神に背を向けているので、自ずとそうなっているのです。

そして、男に対してはこう宣言されました。「3:17・・大地は、あなたのゆえにのろわれる。あなたは一生の間、苦しんでそこから食を得ることになる。」働くことは、神によって祝福されます。けれども、苦しんで食を得るようになるとあるように、労してもそれに報いるような実が結ばれないという苦しみを受けました。これもまた、生々しい呪いです。労働について、働きがいと、自己実現ができる場だと思っているならば、現実が程遠いことは、働いた人であればだれもが知っています。これも、神が元々、労働について定めておられたことではないのです。罪がそうさせているのです。

### 2C キリストの十字架

そして、キリストは、その罪の呪いを取り除くために、十字架につけられました。「ガラ 3:13 キリストは、ご自分が私たちのためにのろわれた者となることで、私たちを律法ののろいから贖い出してくださいました。「木にかけられた者はみな、のろわれている」と書いてあるからです。」神の律法の中で、木にかけられた者はみな、呪われているとあるので、主が十字架の木にかけられて、呪われた者となりました。けれども、それは私たちが受けている罪の呪いを取り除くためです。先に、木に打ち付ける藁人形の話はしましたが、キリストがすでに呪いを木の上で受けてくださったので、この方を信じる者には、呪いがない状態、神の祝福が与えられています。「3:14 それは、アブラハムへの祝福がキリスト・イエスによって異邦人に及び、私たちが信仰によって約束の御霊を受けようになるためでした。」すでに呪いは取り除かれています、祝福が用意されています。

### 3C 神のかたちへの建て上げ

そして、神は、罪によって壊れてしまった人生を立て直してくださいます。これを贖いとも呼びま

す。贖いとは、買い戻すという意味です。罪に売られてしまった人を、対価を払ってご自分のものとする姿です。罪に売られてしまった私たちを、独り子のいのちという対価、犠牲を払って、神のものにしてくださいということです。主は、罪によってバビロンに破壊されたエルサレムについて、必ず後に、その麗しさを取り戻すことを、こう約束されました。「イザ 61:3 シオンの嘆き悲しむ者たちに、灰の代わりに頭の飾りを、嘆きの代わりに喜びの油を、憂いの心の代わりに賛美の外套を着けさせるために。彼らは、義の樅の木、栄光を現す、【主】の植木と呼ばれる。」灰の代わりに頭の飾りをかぶらせてくださる、とあります。ここの頭の飾りは、英語では beauty です。美容院で、髪が灰にまみれた女性に対して、美容師が、その灰を洗髪し、髪を整え、そして頭にきれいな飾りをつけるようなイメージです。これを、神は私たちの人生で行ってくださいます。

## 2B 打ち壊す偽教師たち

ですから、罪の呪いを取り除くキリストを愛し、自分の内で、神の建て直し、贖いが行われているのがキリスト者であります。それを阻むようなことをしている者たちがいます。建て直すのではなく、逆に打ち壊すようなことをしています。そうした偽教師が、コリントの教会にいて、彼らがそうした者たちに影響を受けて、様々な問題を持っていました。

パウロは、そうした者たちの存在を、この手紙の中でも言及していました。「3:17 もし、だれかが神の宮を壊すなら、神がその人を滅ぼされます。神の宮は聖なるものだからです。あなたがたは、その宮です。」彼らが、聖霊の住まわれる神の宮なのに、それを打ち壊そうとしている者たちは、神が滅ぼされると言っています。「4:15 たとえあなたがたにキリストにある養育係が一万人も、父親が大勢いるわけではありません。この私が、福音により、キリスト・イエスにあって、あなたがたを生んだのです。」パウロが、初めにそこの教会を建て上げました。その後、教師だと名乗って、パウロの使徒としての権威を引き下げることによって、自分が正しい教師などと吹聴している者たちがいました。しかし、パウロの伝えている福音こそが、彼らを救い、新しく生まれさせたのだと言っています。

そして第二の手紙ですが、パウロははっきりと言っています。「11:13-15 こういう者たちは偽使徒、人を欺く働き人であり、キリストの使徒に変装しているのです。14 しかし、驚くには及びません。サタンでさえ光の御使いに変装します。15 ですから、サタンのしもべどもが義のしもべに変装したとしても、大したことはありません。彼らの最後は、その行いにふさわしいものとなるでしょう。」彼らは、「11:4・私たちが宣べ伝えなかった別のイエスを宣べ伝えたり、あるいは、あなたがたが受けたことのない異なる霊や、受け入れたことのない異なる福音を受けたりしても、あなたがたはよく我慢しています。」とのこと。別のイエスを宣べ伝え、異なる福音をつたえていて、超自然的な現象も起こっていたのでしょう、異なる霊を受けるといふこともしていました。そして、彼らがカルト的な教師であることも、パウロは暴露しています。「11:20 実際あなたがたは、だれかに奴隷にされても、食い尽くされても、強奪されても、いばられても、顔をたたかれても、我慢していま

す。」このような仕打ちを受けているのに、だまされているので、それは神のためだと思い込み、そして、親の愛をもって愛しているパウロを、酷い人なのだと思い込まされていたのです。パウロが、「**主を愛さない者はみな、のろわれよ。**」と手紙した背景がお分かりになったかと思います。

### 1C 知識による高ぶり

そういった者たちの特徴は、人にある肉の弱さに付け込んで、キリストの愛から引き離すことです。コリントの人たちは知恵を誇っていました。それで、十字架につけられたキリストではなく、世の中にある知恵を前面に出して、あたかもこれこそが正しい、これこそが賢いとしたのです。しかし、パウロは言いました。「8:1 **しかし、知識は人を高ぶらせ、愛は人を育てます。**」

### 2C 妬みや苦み

そして、パウロとアポロ、またユダヤ人との間の使徒、ペテロなどを使って、私はパウロにつく、私はアポロ、私はペテロというように、派閥が起こっていました。そこにはもちろん、妬みがあります。「3:3 **あなたがたは、まだ肉の人だからです。あなたがたの間にはねたみや争いがあるので、あなたがたは肉の人であり、ただの人として歩んでいることにならないでしょうか。**」すべてがキリストの福音の働き人であり、同じ福音を宣べ伝え、ただ働きが異なっていただけでした。彼らの中では、信仰の一致が完全に保たれていました。しかし、未熟なコリントの人たちが、表面的なことと言い争い、分かれていただけです。これを利用したのが偽教師たちです。

### 3C 行いによる実

そうして、こうした人々は、言っていることだけを聞いていると、その話し方だけ聞いていると、とても正しいように聞こえます。その話に引き込まれます。けれども、冷静になって聞くと、中身がありません。実質がありません。ただ話だけです。そして、その人たちの行っていることを見ていくと、とんでもないことを行っています。イエス様は偽預言者については、その実で見分けることができると言われました(マタイ 7:15-20)。口では主を敬っているように話すけれども、心は遠くに離れ、行いが、主を信じていないどころか、主を否定していることが分かるのです。「イザ 29:13 **主は言われた。「それは、この民が口先でわたしに近づき、唇でわたしを敬いながら、その心がわたしから遠く離れているからだ。彼らがわたしを恐れるのは、人間の命令を教え込まれたことである。」**」

### 4C サタンの企み

そして、これらはサタンのしわざです。先ほど、サタンでさえ光の御使いに変装するのだと読みました。神は、キリストの愛によって、ご自分のかたちに人々を建て上げようとします。しかし、サタンは、その働きを取り壊そうとします。そうした霊の戦いが、繰り広げられています。

### 3B 建て上げる人と引き下げる人

キリスト者たちの交わり、また教会において、ある人が来たことによって、とても豊かにされた、



祝福されたということがあるでしょう。あるいは、ある人が来たことによって、教会が荒らされた、混乱したということがあるでしょう。恵みを分かち合っているのか、あるいは呪いをもたらしているのかは、一目瞭然です。建て上げる人と、引き下げる人のどちらもがいます。

## 2A 「主よ、来てください」

そこで、このような人々、主を愛していない人たちがいる中で、パウロが次に書いたのは、「**主よ、来てください。**」です。これは、普通のギリシア人が聞いても、もしかしたら分からなかった言葉です。「マラナ・タ(Marana tha)」と書いています。これは、アラム語で、アラム語をそのままギリシア語に書いたものです。これは、教会の人びとが、主が再び戻って来られることを切望している声です。実に聖書の最後、黙示録の最後に、同じ言葉があります。「黙示 22:17 御霊と花嫁が言う。「来てください。」これを聞く者も「来てください。」と言いなさい。」「22:20 これらのことを証しする方が言われる。「しかり、わたしはすぐに来る。」アーメン。主イエスよ、来てください。」教会はキリストの花嫁で、キリストはその花婿です。花婿が花嫁を引き取られ、その後結婚式を挙げるのが、主が来られる出来事です。この時のことを恋い慕っているのが、「主よ、来てください。」なのです。

## 1B ローマ迫害下のキリスト者

ローマ時代のキリスト者は、このマラナタという言葉や、挨拶言葉に使っていたと言われていました。ローマの支配の下で生きるキリスト者は、カエサル、つまり皇帝が主であるとする告白はできないとしていました。イエスが主ですから、この方以外の、どの人物も主としてはいけないのです。ローマの中には、いろいろな民族、いろいろな国出身の人々がいました。宗教はばらばらなのですが、けれども、ローマ皇帝を主とする宗教儀式さえ守っていれば、それでよしとしたのです。心がともなっていないくとも、皇帝の像の前で香をたくことだけをする。また時々行われる儀式で、皇帝を主と告白する、これだけでよかったのです。しかし、イエスを主としているキリスト者たちは、それはできないとしました。それで、激しい迫害を受けるようになります。

そのような困難を受けている中で、彼らは「マラナタ」と言い交わしていたのです。主よ、来てくださいと互いに挨拶を交わしていました。

## 2B 上を見上げる信仰

主が来られることを待ち望むのは、今の地上で起こっていることではなく、天を見上げること、上を仰ぎ見ることであります。「ピリピ 3:20 私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主として来られるのを、私たちは待ち望んでいます。」「コロ 3:1 こういうわけで、あなたがたはキリストとともによみがえらされたのなら、上にあるものを求めなさい。そこでは、キリストが神の右の座に着いておられます。」主が来られることを思い起こすことによって、私たちは、困難な中で正しい見方で、物事を見ることができるようになります。

### 1C 永遠の残るもの

私たちは、困難があると、どうしても気落ちしてしまいます。もうこれで終わりだと思ってしまうのです。けれども、主を見上げれば、これらのものがむしろ過ぎ去り、残るのは主ご自身と、主の語られたみことばなのだ、と思ひ起こすことができるのです。永遠に残るものが大事で、見えるものは過ぎ去るのです。「Ⅱコリ 4:18 私たちは見えるものではなく、見えないものに目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものは永遠に続くからです。」

### 2C 過ぎ去る世

かなり前に、私たちがカルバリーチャペル・コスタメサで行われた、牧者たちの集まり、牧師会議に参加した時のことです。当時、アメリカに、また世界に、とてつもない暴風のように、ある悪い教えが吹き荒れていました。そこで、いろいろな牧師がその恐ろしさを、説教壇のところで語りながら、落胆の思いが礼拝堂を立ち込めた時に、最後にチャックが壇上に上がり、こう言いました。「これらのものは過ぎ去るのです」。そうですね、パウロ、偽りの教えについては、「教えの風」と呼びました(エペソ 4:14)。そして、この世の有様は過ぎ去ります。「マコ 13:31 天地は消え去ります。しかし、わたしのことばは決して消え去ることがありません。」

### 3C 主にある喜び

それで、主が来られることを思い起こせば、私たちは、気落ちしていても、不安になっても、また奮い立つことができるのです。これらは過ぎ去るのだ。これらの悪いもの、偽りのものは、正しく裁かれるのだと分かるのです。ハバククのことを思います。ユダはますます飢饉で食料が不足し、最後はバビロンによって滅ぼされることを知りながら、それでも、彼は喜び踊ったのです。「3:18 しかし、私は主にあつて喜び踊り、わが救いの神にあつて楽しもう。」なぜかという、そのバビロンが徹底的に滅ぼされる幻を主が彼に見せてくださったからです。主が、正しく裁かれるのを、天において見ている観衆は、喜びにあふれています(黙示 19:1-2)。

## 3B 主への愛の言葉

### 1C 花嫁なる教会

私たちの、イエス様への愛は、花嫁のそれであることを先に話しました。花嫁の、花婿に対する愛は、いや、愛について言えますが、愛は、その忠誠に大きく寄ります。どんなことがあっても、それでも私はこの方から離れません、という愛です。結婚式の誓いは、このようなものです。「あなたは誰々を妻(夫)とし、健やかなるときも、病めるときも、喜びのときも、悲しみのときも、富めるときも、貧しいときも、妻を愛し、敬い、慰め合い、共に助け合い、その命ある限り真心を尽くすことを誓いますか？」愛は、恋をしている時に出てくる分泌物、ホルモンによって支えられているのではなく、神がキリストによって私たちに示してくださった、真実な行いによるものです。こちらのほうが都合がいいから、あちらのほうが得するからという動機で動くところには、愛はありません。気持ちだけで、「私はこれこれをします。」というところにも、愛はありません。私たちは、どんな時にも、

「はい」は「はい」という態度で、この方が言われていることを優先していくのです。

#### 2C 引き落とす者たちへの呪い

そして、そのような真剣な愛を邪魔するようなものに対して、自分や周りの仲間を引き落とすようなものに対して、「**主を愛さない者はみな、のろわれよ。**」と告白してみてください。



1C 十字架の否定

2C 使徒パウロの否定

3C 肉の行い

The clue to its meaning lies in two places: (1) Paul's own usage of a similar "curse" in Gal. 1:8–9, where it is pronounced on those who deviate from the gospel that Paul preached. There is no good reason to think it means otherwise here, especially in light of the frequent warnings of this letter, some of which take even stronger expression than this.<sup>29</sup> (2) The similar warning that moves toward exclusion in 2 Thess. 3:14–15, where the warning is precisely for those who "do not obey our instruction in this letter."

Thus, using traditional language whose origin is uncertain, Paul offers one last warning to those who persist in deviating from his gospel, and now especially to those who might refuse to obey the injunctions of this letter. He has just authenticated the letter with his signature. That leads him to assert their need to obey; but instead of putting it in terms of their obeying him, he puts it in the ultimate language of Christian obedience: "If anyone does not love the Lord." That covers the whole letter. To insist on human wisdom over against the gospel of the Crucified One is to "not love the Lord"; so with living in incest, attendance at idol feasts, and so forth. The ultimate issue for Paul, therefore, is not their obedience to his word, but their love, or lack thereof, for the Lord himself. Failure to obey him is lack of love for him; to reject him in this way is to place oneself under the *anathema*.<sup>30</sup>

But what, then, is the meaning of *Maranatha*? This is a particularly complex issue, both because of the ambiguity as to its meaning in Aramaic and because of its place here in the letter.<sup>31</sup> The Aramaic lying behind this Greek (and English) transliteration

---

<sup>29</sup> Cf. 3:17; 5:4–5; 6:9–10; 11:29; 14:38.

<sup>30</sup> Cf. C. Spicq, "Comment comprendre  $\phi\lambda\epsilon\acute{\iota}\nu$  dans 1 Cor xvi,22?" *NovT* 1 (1956), 200–204, who sees the sentence not as a liturgical formula, but as describing the state of a person who has rejected Christ and is thereby excluded from the church and finally the heavenly kingdom. He is followed by W. Dunphy, "Maranatha: Development in Early Christology," *ITQ* 37 (1970), 294–308, esp. 302.

<sup>31</sup> The bibliography is considerable. Among the more significant items, see K. G. Kuhn, *TDNT* IV, 466–72; C. F. D. Moule, "A Reconsideration of the Context of *Maranatha*," *NTS* 6 (1959/60), 307–10; S. Schulz, "Maranatha and Kyrios Jesus," *ZNW* 53 (1962), 125–44; P.-é. LANGEVIN, *Jésus Seigneur et l'eschatologie* (Bruges/Paris, 1967), pp. 168–208; Albright and

can be pointed either *Marana tha* (= “Our Lord, come!”) or *Maran atha* (= “Our Lord has come”). In either case its use in a context like this can only be explained on the basis of its prior use in the Aramaic-speaking church, almost certainly in the context of worship. Whether or not it belonged to the “liturgy” of the Lord’s Table in such an early setting is moot. If so, then it probably meant “Come, O Lord” (as the NIV), and is to be understood as an early eschatological prayer, similar to that in Rev. 22:20, “Come, Lord Jesus.”<sup>32</sup> This is precisely its function in the concluding eucharistic prayers in the *Didache* 10:6.<sup>331</sup>

主を愛する者

Rom. 8:28; 1 Cor. 2:9; 8:3; Eph. 6:24<sup>2</sup>

呪い

12:3; Rom. 9:3; Gal. 1:8–9)<sup>3</sup>

1 Corinthians 16:21–24 (NKJV)

The malediction is probably intended to apply to any headstrong provocateurs within the church. A ban formula is found in the conclusion to 2 Thess. 3:14 (“If anyone does not obey our instruction in this letter, note them, do not associate with them [cf. 1 Cor. 5:9], in order that they be put to shame”) and in Titus 3:10–11 (“After a first and second admonition, shun a factious person, because you know that such a person perverts and

---

Mann, “Two Texts”; Dunphy, “Maranatha”; M. Black, “The Maranatha Invocation and Jude 14, 15 (I Enoch 1:9),” in *Christ and Spirit in the New Testament* (ed. B. Lindars and S. S. Smalley; Cambridge, 1973), pp. 189–96.

NIV New International Version

<sup>32</sup> Gk. ἔρθου κύριε Ἰησοῦ, which would be nearly the Greek equivalent of the Aramaic *Marana tha*.

<sup>33</sup> This stands in direct opposition to those, such as Robinson, “Traces,” who think it functions as a prayer of invitation for the Lord’s presence at the beginning of the Eucharist proper. That is to force the sure evidence of the *Didache* and the Revelation to conform to a dubious historical reconstruction, namely the “sequence” of the conclusion of this letter.

<sup>1</sup> Fee, G. D. (1987). [The First Epistle to the Corinthians](#) (pp. 837–838). Wm. B. Eerdmans Publishing Co.

<sup>2</sup> Garland, D. E. (2003). [1 Corinthians](#) (p. 773). Baker Academic.

<sup>3</sup> Garland, D. E. (2003). [1 Corinthians](#) (p. 773). Baker Academic.

sins, being self-condemned”). By contrast, a positive formula appears in Gal. 6:16 (“For those who will follow this rule—peace be upon them, and mercy”) and in Eph. 6:24 (“Grace be with all who love our Lord Jesus Christ in incorruption”).<sup>4</sup>

---

<sup>4</sup> Garland, D. E. (2003). [1 Corinthians](#) (p. 773). Baker Academic.